

池田草庵先生に学ぶ会

「姪盛小齋記」を読む 令和七年二月〜『池田草庵先生著作集』 P240〜241

五月三日(祝日)学習分(担当・俊彦、左起子・恭子・梅井・藤原・宮崎)

姪盛小齋記(三)

不然則、歲月不_レ留、駛如_二弓箭_一、一瞬息之間、忽焉
向衰及_レ老、空山落日、暮雨蕉窓、

読み

然らずんば則ち、歲月留らず、駛^{はや}こと弓箭^{きゅうせん}の如し、一瞬息の間、忽^{こつえん}焉として
衰に向かい老に及ぶ、空山落日、暮雨蕉窓

言葉

不然_二シカラズ_一 しからず そうではない
駛_二ハセる_一 はやい 弓箭_二キユウセン_一 弓と矢
忽焉_二コツエン_一 すみやかなさま 突然 空山_二クウザン_一 物寂しい山
瞬息_二僅かな時間_一 暮雨_二夕暮れ_一に降る雨 蕉_二窓_一

訳

そうでなければ、歲月は留まらないで過ぎ、その速いことは弓と矢のようだ。
たちまちのうちに、衰え老いてしまう。静まりかえった山には落日、暮れの
雨が窓を打つ、

徒抱_二枯落窮廬之嘆_一者、直目前之事耳、
至此豈堪_二復回_レ首_一、予每豫念_レ之、

読み

徒^{ただ}枯落^{きゅうろ}窮廬^{きゆうろ}の嘆き抱くは、直^{ただ}目前^{まへ}の事のみ、
ここに至りて豈また首を回して堪えんや、予每豫これを念う

言葉

徒_レ耳_二たダ_一(なる)のみ むだに
枯落_二コラク_一 草木が枯れ落ちる 落ちぶれる 窮廬_二キユロ_一 貧しい家
予_二われ_一 自分 あらかじめ 前もつて
豫_二あらかじめ_一 与える あずかる

「補説」本来は「豫」と「予」は別字。

訳

ただ、落ちぶれて、貧しいくらしを嘆いているのは、直ぐ目の前のことのみ、ここにきて、またふり返って見ることに堪えることができようか。私いつもこのことを頭に置いている。

輒覺_レ毛聳骨寒、汝今去_レ我之年_一尚遠矣、
學無_レ若_レ及早、

読み

輒ち毛^{もうしやう}聳骨寒に覚え、汝今我の年を去ること、尚遠しかな、學は早くを及ぶに若^{しく}は無し、

言葉

輒_レすなわち 覺_レおぼえる さとる 毛聳_レモウシヨウ 毛が立つ
骨寒_レ (? 寒骨_レ貧賤の身) 尚_レそのうえ
去_レ間が空く 時間が隔たる 若_レは無し及ぶものはない_レ

訳

すなわち体中が寒さを自覚する、お前は、今我の年とは離れその上かなり離れている。学問はやくにするのにこしたことはない。

宜_レ自戒而勉_レ之、勿_レ復效_レ予之今日_一、
而予亦宜_レ自戒、而無_レ復貽_レ衰老之悔_一而已矣、

読み

宜しく自戒して之に勉めるべし、復た予の今日を效^{まね}るなかれ、而して予も亦宜しく自戒して、衰老の悔を貽すこと無しにすべしのみ、

言葉

勿_レナカレ してはいけない 效_レコウ ならう まねる
貽_レのこす 而已_レのみ 而已矣_レノミ 而已を強調した形

訳

自戒して、之に勉めるようにするのがよい。また、私の今日をみならってはならない。そして、私もまだよく自戒して、年取ってからの悔いを無いようするだけだ。

書此與汝、以爲他日之左券可乎、
雖然、予自少年非不爲此言也、而遂有今日、

読み

此を書して汝に與え、以つて他日の左券と爲すべきかな、然かりと雖えども、
予も少年より、此の言を爲ざるにあらざるなり、而れども遂に今日あり、

言葉

左券||契約を書いた木の札を二つに割つた左半分 約束の証拠
然雖||そうではあるが 不為||なさず

訳

この書いたものをお前に渡すから、いつかの日の証拠としたらよい。そうは言
つても、私も少年の頃よりこの言葉のようになかった訳ではない。しかし、
とうとう今日がある。

則今日之言、亦猶或類、夫少年一時之意興乎、
予言而多懼矣、己酉初冬、草菴子病中把筆

読み

則ち今日の言、亦猶おそ或いは夫れ少年一時の意興の類か、
予の言おそ而かれども、懼れ多し

己酉初冬、草菴子病中筆を把りて記す

言葉

意興||、
懼||おそれ 心配

己酉||ツチノトリ 嘉永二年(一八四九 草庵三歳) 初冬||陰曆十月

訳

つまり、今日の言葉も、やはりなお少年の一時の思いつきに類するようこと
あるか。

私の言葉には、危惧するところが多い。

嘉永二年初冬 草庵私は病の床にあつて筆を持って記す